

史遊サロン通信

No.258号
平成29年
5月5日

編集
042-754-9360
arai-hiroshi@
jcom.home.ne.jp
新井宏

今月の史遊サロンは五月二十日です

この『史遊サロン通信』がお手元に届いて間もなく、韓国の大統領選挙が行われる。北朝鮮の挑発も「寸止」の様相ではあるが相変わらずである。

ところで、韓国大統領選挙では「女」が決め手となるのをご存知だろうか。もちろん「女」と云っても週刊誌ネタではない。

まず、当選するはずのなかった盧武鉉が僅差で保守党の李会昌を破ったのは、米軍装甲車が事故で女子中学生をひき殺したのに大統領選挙直前に無罪となってしまうことが最大の要因であった。激しい反米運動が一気に燃え上がり、左翼の大統領が誕生した。

今回の大統領選挙は、朴槿恵の自滅の面もあるが、そもそもは鄭ユラと云う娘が梨花大学に裏口入学したことへの「僻み・嫉み」が

発端であった。朴槿恵の背後に付く崔順実の娘であるが、私立大の梨花大に不正入学した

位で大騒ぎになるのが韓国である。とにかく若者の間では、学歴ほど「僻みや嫉み」を生む問題はなく、それが朴槿恵と崔順実への疑惑の発端となり、「ろうそくデモ」を通して一気に大統領弾劾にまで進んでしまった。

もちろん、そこには朴槿恵の失政があった。二年前にも書いたが、ポーランドの歴史に学ばず、「均衡者外交」などと気取って、習近平と天安門上で腕を組みながら、政治や経済は最悪状態で、もはや動きがとれず、米国の圧力で、慰安婦問題の合意やTHAADの導入を急遽決めざるを得なかった。

左翼側は、「ろうそくデモ」をうまく利用し、今や慰安婦問題の再交渉やTHAAD配

今月の史遊サロンは予定通り第三土曜日の五月二十日です。会場は定例の銀座ルノアール八重洲北口会議室。なお、七月の史遊サロンも予定通り第三土曜日の七月十五日です。「自由執筆」については、随時お寄せ下さい。「埋め草」も大歓迎。

置反対を叫んでいるが、鄭ユラなどもうどうでも良くなっている。

そもそも朴槿恵は歴代大統領の中で、ただひとり就任時から「加害者と被害者という歴史的な立場は、千年の歴史が流れても変わらない」といい、「その解決なくして日韓首脳会談は行わない」とまで踏み込んでいた。なぜかと云えば、彼女の父親・朴正熙が親日派として追求されており、それを避けるためであったが、それが自縄自縛となり、結局なにもできなくなってしまう。

韓国は反米、反日そして反中の国である。いずれもその底に「僻みや嫉み」がある。だから、日本からばかりでなく中国や時には米国からも嫌われ始めている。(新井宏)

「七歳だったボクは、あの時、

サイパンの戦場にいた」

中川俊彦さんのお話

三月のサロンの例会は、中川俊彦さんをお迎えして、「七歳だったボクは、あの時、サイパンの戦場にいた」というお話を伺った。

中川さんは中島茂さんの友人で、サイパン高等女学校の教師として赴任した父に従い、サイパンに移住、米軍の攻撃が始まった昭和十九年六月には、艦砲射撃を避けてジャングルをさまよひ、七月末には北部の洞窟に辿りついた。しかし、水を探しに行った父が二日たつても戻らない。「海水でも飲みたい」と衰弱した四歳の妹を残し、一歳の妹を負つた母と洞窟を出たところで米軍に捕まった。

数日後には置き去りにした妹も運ばれてきたが、父は母子が去った後に帰ってきて、母子を探しているところを撃たれて亡くなったという。

父を待たずに一生の別れとなった中川さん。平成二十年春の叙勲で受章者を代表して天皇陛下にあいさつしたとき「サイパンでは「ご苦労を」と声をかけられたと言う。今もサ

イパンでの体験を語り継ぐ中川さんは、父との別れを語る時にはいつも涙ぐむという。

おそらく、中川さんにとっては、とても語り尽くせない「お話」であった。わざわざ史遊サロンのために沢山の資料を準備して下さった。しかし、今の史遊サロンは、一方向で講演を伺うような集まりではないので、時間を十分に採って頂くことができず心苦しかったが、その半面、質問や補足意見などが活発で、一定の評価をして下さったのが有難かった。

そんな訳で、折角の資料もなかなか生かし切れなかったので、本号で若干でも補いたいと思う。

まず、中川さんが当日のために準備されたメモを紹介する。

一、父の仕事(国民学校教員)の関係で、昭和十七年、家族五人でサイパン島へ移住。(第一次大戦後、日本の委任統治領)。東京から二三五〇キロ。面積は、伊豆大島の一・三倍〇〇平方キロ。開戦時の日本人は二万五千人。

二、米軍の攻略に備えて、昭和十九年春から陣地など防備を強化。将兵四万三千人が送られてきた。

三、「島都」ガラパンには南洋庁支庁などの公的機関、多くの会社などがあった(「南洋の東京」)。

四、サンゴ礁が隆起してできた石灰岩の島なので、年中、水不足に苦しんだ。

五、真珠湾攻撃から半年後のミッドウェイ海戦で日本軍は大敗。太平洋戦争のターニング・ポイントとなった。 ↓ガダルカナル島、アッツ島……

六、米国は、日本本土空襲のB 29の発進基地として、サイパン島占領を決定、「上陸日は昭和十九年六月十五日」。

七、六月上旬、サイパン島西方に米太平洋艦隊の大艦隊が現れた。二日間の空襲。二日間の艦砲射撃(民間人たちは、山岳地帯に避難)。

八、十五日には、島南西部から海兵隊二個師団、二万人が上陸、最終的には四万三千人)。十六日には歩兵一個師団(二万八千人)が上陸(米国側の海兵隊四万三千人、陸軍二万八千人、計七万人に対して、日本側は、陸海で四万三千人)。

九、避難していた洞窟の向かい側の山に海兵隊が現われ、家族はジャングル地帯に逃げ込んだ(五十二日間に及んだ逃避行生活の始まり)。

十、移動は、昼間は危険なので、夜になつてから。

十一、山中にあったサトウキビもバナナも、空襲などで消失。

十二、途中、出会った親類の陸軍少尉からお握りをもらう。

十三、飲み水はなく、スコールで濡れた葉っぱの雨水を舐めるだけ。

十四、六月十九日からのマリアナ沖海戦での惨敗により、六月二十四日、大本営は「サイパン島放棄」を決定。

十五、七月七日、残存日本兵三千人最後の総攻撃「バンザイ突撃」を敢行して「玉砕」。

十六、翌八日〜九日、島最北端のマツピ岬(現・「バンザイ・クリフ」)で民間人七百〜八百人が集団自決。同じく、マツピ山(現・「スーサイド・クリフ」)でも数百人が集団自決。

十七、七月九日、サイパン駐留米軍、「サイパン島占領宣言」を発表。

十八、七月下旬、大きな鍾乳洞に行き当たったが。水がないため、父は水探しに外へ。

十九、父が戻らないため、母と私は上の妹を鍾乳洞に置いて外へ。

二十、行き当たった農家で、翌朝、米軍に捕まり、ススぺ収容所へ。鍾乳洞に置いてきた妹と、三日後、収容所で再会(父は、同日未明、銃撃を受けて死亡)。

二十一、収容所は、米海軍民政部の命令に基づき管理・運営。

二十二、「住まい」は、焼けたトタン板や米軍が捨てたシート等で囲っただけの「掘っ建て小屋」。

二十三、「食事」は、老人・病人・子供などの働けない者は、1日朝夕の2食(お握り一個)だけ。

二十四、各種施設や集団農場で働いた者には日当が支払われ、昼食も与えられた。

二十五、米軍は日本軍航空基地だった飛行場を修復、長さ三千メートル、幅百メートルの滑走路を完成させ、十一月二十四日、約百機のB 29が東京を初空襲(以後、B 29による日本本土爆撃が本格化)。

この他にも多くの資料を頂戴しているが割愛する。ただ、その中で地図を二つだけ紹介したい。

ひとつは、沖縄、サイパン島、トラック島の位置関係である。私(新井)の父は、水産関係の仕事でトラック島に勤務していたが、戦争に遭わずに帰国している。それは米軍がトラック島沖で日本海軍を破りながら、日本を空襲できるサイパン島に飛行場を作ることが優先し、占領をしなかったことと関係があったらしい。航続距離の関係でサイパンから日本への空襲はできないと思っていたが、中国に着陸したとのこと、不勉強であった。

もうひとつは、中川さんの逃避行の地図である。

なお、中川さんに何か補足等があればと申しあげたところ次のようなメモを頂戴した。

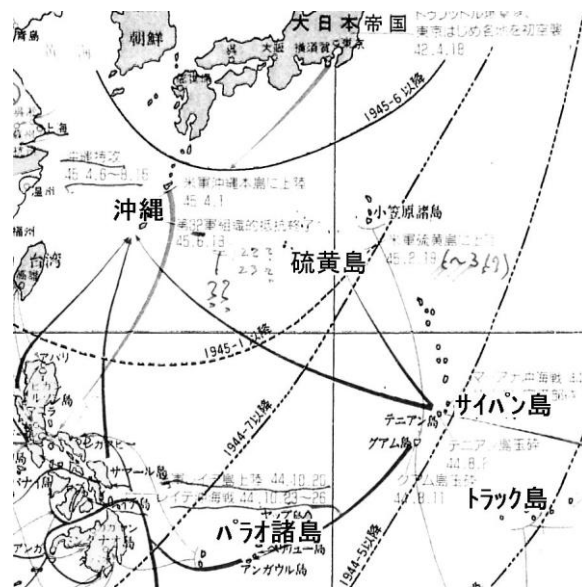
一、在留邦人二万五千人の内、その四十%に当たる一万人が空襲、艦砲射撃、集団自決などにより戦没した(同じように、地上戦が行われた沖縄では、県民の六人に一人が戦没した)。また、日本守備隊四万人の内、九十%に当たる四万千人が戦死した。一方、上陸米軍の七万千人の内、戦死したのは、その僅か五%の三千四百人だった。

二、六月十三日と十四日に集中的に行われた艦砲射撃は、その後も、「バンザイ突撃」

により日本軍の組織的抵抗が終熄した七月七日まで断続的に行われ、サトウキビ、野菜、果物などが豊かだった島は、緑の島から裸の島になった。また、在留邦人が故国日本を偲んで名付けたという「南洋櫻」もそのほとんどが消失した。

三、戦争で生き残った民間人一万五千人は、ススぺ収容所での貧しい食事、粗末な共同住宅で生活し、私達家族三人が常夏の島から厳冬の内地(神奈川県浦賀)へ引揚げてきたのは、昭和二十一年の一月だった。その頃、日本本土の人々も、焼野原となった街々で、食糧不足の苦しい生活を続けていた。

その他、私信によりますと、中川さんは、三十数年に亘り、左足半月板損傷による痛みに悩まされ(少し早歩きはできませんもの)、
「走る」ことができません)、加えて、数年前から腰痛にもなり、日々の生活に難渋しておられるとのことでした。



探訪「山中城公園」

中島 茂

天守閣も城郭もなく、水を湛えた堀もない山中の城跡が国の指定史跡であり、「日本百名城」の一つになっている。その魅力はどこにあるのだろうか。

三月下旬の肌寒い日、「山中城跡公園」を訪れた。JR三島駅からバスで三十分ほどの距離にある。

バス停の目の前に城跡はあった。

ゆるやかなスロープを登る見学ルートは杉の丸太を使ったステップで固められ、歩きやすい。

この山中城は箱根山の西南の中腹、標高五百八十メートルに位置する山城で、諸曲輪は箱根外輪山から西に延びる三本の尾根の上に築かれた。

さらに箱根旧街道を隔てた「岱崎出丸」があったが、小田原合戦の開始時には未完成だった。

道標に従い、バス停近くの「広場」から「三ノ丸堀」(空堀)→「田尻の池」(貯水池)を経て、「西ノ丸」に至り、物見台に立つ。

薄曇りの寒い日だったが、北に富士山、愛鷹山をのぞむ眺望はすばらしい。

この「西ノ丸」は特徴ある空堀「畝堀」、
「障子堀」で囲まれている。

二つとも空堀の中に障壁を設けたもので敵兵の移動を妨げ、格好の標的とする目的で造られた。

単列のものを「畝堀」と呼び、複列格子状のものを「障子堀」と呼ぶが、畝の高さは二メートル近く、区面の法面は六十度ぐらいである。



畝堀



障子堀

写真は伊東潤著「城を攻める城を守る」(講談社現代新書)による。

手前の「畝堀」の底に降りてみたい誘惑に駆られたが、思いとどまった。

現在は芝でおおわれているが、築城当時はむき出しの関東ローム層であり、武者といえども、一度底に降りたら登るのは難しかっただろう。

北条家百年の経験を生かした築城術が、水利の悪い山城に、駆使されていたことがわかる。「西ノ丸」から「北ノ丸」へ、さらに「天守台」、「本丸」跡に出た。

ここでシニアのカップルの方に出会い、この日初めて写真を撮ってもらった。人影はほとんどなく、静寂そのものだった。

「兵糧庫」↓「二ノ丸」を経て「三ノ丸」
「宗閑寺」に出た。

この寺には、戦死した北条軍や豊臣軍の武将の墓がひっそりと並んでいた。

振り出しの「広場」に出たあと、「箱根旧街道」の南にある「岱崎出丸」に向った。この日最後の見学地である。

豊臣秀吉軍の侵攻に備えて急遽構築された出城であったが、完成を見る前に戦端が開かれてしまった。

「岱崎出丸」の尖端「すり鉢曲輪」から三島方面を眺めていると、突然あたりの静寂を破って戦いの雄叫びが聞こえてくるような錯覚にとらわれた。

「岱崎出丸」は緒戦の緒戦で、数万の豊臣軍の猛攻を受け、あっけなく陥ちた。

山中城の諸曲輪も一日ともちこたえることができなかった。

小田原に本拠をもつ北条氏は、二百三十五万石という広大な領土の要所に十数カ所の支城を構築していたが、山中城は西ノの防衛線の要であった。

この城がその役割を果せなかったのはなぜか。

作家の伊東潤は、前掲書の中で、「最大の要因は北条本家を頂点とする組織に欠陥があり、指揮系統が曖昧であったうえに、一丸となって戦う態勢がなかったことにある。」と述べている。

「小田原合戦」の全局を見ても、秀吉の強力な統制のもとに圧倒的な兵力と経済力をもつ遠征軍に対し、足並みの乱れていた北条軍に勝ち目がなかったことは、私にもよくわかる。

ほぼ二時間で予定の見学を終えたが、歴史と景観が見事に融合したこの地は、見る者の想像をかき立て、十分に楽しませてくれる。

平成二十九年四月十三日記

出雲大社再考 (一一二)

近世最大危機佐太神社紛争 (4)

朱子学と儒家神道

村上 邦治

寛文遷宮は、幕府の全面的な資金援助を得て、長年の夢であった正殿建立と、神仏分離を一挙に成し遂げた。この幕府支援の背景に、朱子学の興隆があった。

日本朱子学の祖藤原惺窩の弟子林羅山(一五八三—一六五七)が、家康から四代家綱にわたり、お伽衆、侍講、談判になり、將軍側近として幕府の体制作りに関わった。朱子学に基づく幕藩体制の理論的正当化を成し遂げ、長期安定をもたらした。仏教的な出世間の志向を排除し、現世の秩序を重視し、万民(父子・兄弟・夫婦・長幼・君臣)には道徳として朱子学の思想である、五常(仁・義・礼・智・信)の実行を求め、封建的基本組織である身分の上下尊卑を受け入れ、君臣関係と身分関係は不滅とした。これらの功績により、二代目春斉以降林門朱子学は、幕府の正統学問の地位を与えられた。当然幕閣や大名に波及し、各藩校で正課となった。

同時に、京都五山の出身でありながら惺窩や羅山は、身近に仏教の人倫無視の紊乱や不祥事をみて、排仏論を強く主張した。朱子学の立場から神道を研究し、神仏習合を批判、古来の神道復活を提唱した。堀尾氏の改易により、松江藩の藩主になった松平直政が、羅山の影響を受けたことに相違ない。

朱子学は学問のみならず、儒家神道に影響を与えた。妙心寺の禅僧であった山崎闇斎は、吉川神道(吉川惟足)や伊勢神道(度会延佳)の教えを受け、純粹朱子学の立場から、人間には神の靈が宿っており、人と神は一体であるとし、心の在り方として正直を重視し、神儒一致・棄仏帰儒を唱え、新たな儒家神道を打ち立てた。「神垂は祈禱を以て先となし、冥加は正直を以て本と為す」(倭姫世記)から、垂加神道とよばれた。一六六五年家綱の後見人として長く幕政を担った会津藩主保科正之に、賓師として招かれたことから、名声が高まり、垂加神道も広まったのである。この闇斎に師事したのが寺社奉行井上正利であった。

資金支援した幕府の財産は、家康の時六百萬両(駿府二百萬両含む)といわれていたが、三代將軍家光の時、日光東照宮建立(七

十萬兩)・江戸城本丸造営、相次ぐ江戸大火等により、あらかた消費されていた。そのため元禄時(一六九五)には、小判を改鑄せざるを得なかった。支援は元禄の直前であった。

新松江藩主は羅山の影響をうけた敬神家であった。長く寺社行政を握っていた崇伝(一六三三)、天海(一六四三)が死亡、新たに寺社奉行は一六五八年から將軍直属の奏者番兼務となり、異例の一〇年間井上正利は寺社奉行であり続けた。寛文遷宮はこれら偶然が重なり、実現できたのである。

しかし悲劇は、この幸運を、出雲大社自らの力である、と過信したところから起きた。

(この項つづく)

相原精次さんの新刊書

『捏造の日本古代史』えにし書房

「明治維新後から戦後七十年にまで及ぶ古代史のタブーに切り込む渾身の論考」

定価税別で二〇〇〇円。

「磁力永年変化」問題の総括

高橋 正彦

——本邦古墳時代に既に、磁針による方位測定が行われた事は既に論じた通りである。

但しこれら立論の基礎は、確立された「磁針の経年偏移(永年変化曲線)」であるが、その経年変化に関する、未だ何ら確かな理論も提示されていないのが現状である。——

ところが、【磁針の偏移は太陽活動(地球に降下する放射線総量に反比例)に相関する可能性】が顕出した。これは極めて重大な事実であるので、概略を速報する。

① — 【放射性炭素濃度の偏移 $\parallel \Delta_{14C}$ 】

とは——

放射性炭素十四年代の基礎は、等量の宇宙線によって恒常的に等量の炭素十四が生成するのでなく、宇宙線(太陽の黒点磁場)の強弱に左右されるとの観点にある。前者の強度偏移量は Δ_{14C} で表されるが、その濃度偏移は微小であり、% (% の十分の一) 単位で表される。

(太陽活動には図に見る様に数回の極小期があり、極小期には太陽黒点が消失する。二〇一七年は正にこの状態にある。)

現在、精密な炭素十四年代測定に資するため、 Δ_{14C} の経年偏移は数万年前から現代に至るまで、年輪年代を基礎に五年単位、世界規模で精密 (INTCAL 04) に求められている。

本論の図 A・B の「赤線」はその前一〇〇〇年〜後二〇〇〇年の間を五年刻み、六〇〇点のデータから成る。図の◎はこれらの内で、経年偏移の大きな点のみを抜き出したものである。

② — 【水月湖コアの残留磁気】の偏移——

原データは糸田千鶴 (1993) による。各データの■の間隔は二五年 (三ミコア \parallel 三千年)、単位は度、(東方偏移を十で表示する。)

③ — 【①・②の相関の検証の視点】——

①②は大まかには前一〇〇〇年来漸減の後、後五〇〇〜六〇〇年頃を底とし以降漸増に転ずる。但し、この間両者に逆張りの位相が入るため、互の相関が解り難くなっているので、誰も両者の相関を指摘できなかった。

● しかし、① (Δ_{14C}) の値の大きく動く期間に限りその変移を見ると、①②は相関している事が明らかとなった。

イ、図 A B 上の曲線① (赤線) は五年毎の Δ_{14C} であるが、通常は変移が微量であり、各点は密接しており個々点は表示できない。

ロ、ところがその値が二より大きな特異部分がある。これは五〇年に換算すると二〇%に当たり、相当大きな変化量である。その初点と末点を赤●、中間諸点を桃色○で示した。

ハ、この部分の太線に対応する傾向線は直近年の②の曲線上に存在する。その対応部を*で示し、その位置に A \sim U の記号を振る。A \sim U は②線上の特定点を示す。①②上の特定点間の照合関係を矢印(点線)で示す。

例えば、前一〇七〇〜六五と一〇六五〜六〇の変移幅は、四・四、六・一と大きいのが、②の照合点は、A (一一〇〇〜一〇七五)、B (二〇七五〜五〇) で両ピーク一〇七八・一〇七五年の乖離は十年である。

ニ、同様に、①②年代の接近した特異ピーク群を ▼▲ で示すと両者の乖離は、

- 前四世紀極小期 (前三四〇年と三五〇年)
- Wolf 期 (①一三二五年②一三二五年) 乖離なし

● Spoerer 期 (①一五三〇年②一五二五年) 乖離五年

— 要するに前一〇〇〇年から後一五〇〇年の二五〇〇年にわたり、 $\Delta^{14}C$ の特異点と、残留磁気の特異点年次は極めてよく照合すると言えよう。

ホ、ここより水月データに関する重要な結論が得られる。

- ① 水月コアデータは太陽磁気に連動する。
- ② その堆積による略年次は INTCAL の年輪による絶対年代と極めてよく照合する。
- ③ 磁針偏角は前六〇〇年頃の東偏から漸減し、後三〇〇年頃に〇度となり、以後西偏に転じ、六〇〇年ころを底とし、以後漸増に転じた。東偏・西偏の転換点を四〇〇年頃と遅く取る広岡説は誤りである。

